いつまでも消えない炎と忘れられない思い。

The Challenge Spirits

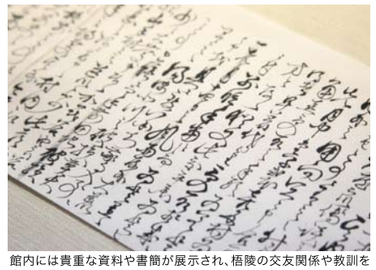
高さ5m、根幅20m、延長600mにも及ぶ広村堤防（国指定史跡）。昭和21年の昭和南海地震で起こった津波を食い止め、被害を最小限に抑えた。

梧陵の功績や人柄を知ることができる濱口梧陵記念館。津波防災教育センターとともに稲むらの火の館を構成する。電話／0737-64-1760

濱口梧陵記念館で限定発売されているオリジナルの醤油「稲むらの火」。

「津波防災教育センター」では、家族で楽しみながら津波防災の知識を学べると東日本大震災以来、来館者が増えている。

広村を襲う安政南海地震津波（1854年）の実況図。梧陵が稲むらに火を放ち広村の村人たちを誘導する姿が克明に描かれている。



館内には貴重な資料や書簡が展示され、梧陵の交友関係や教訓を身近に感じることができる。

梧陵が見つめ続けた経世済民の理想。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が、A Living God（生ける神）として紹介し、海外でも広く知られることとなった濱口梧陵。大津波から村人を助け、民間人でありながら復興に私財を投じた「稲むらの火」から再び歴史に学ぼうとする気運が高まっている。

梧陵は1820年、ヤマサ醤油の創業家の一族に生まれた。12歳で本家の養子となり、1853年七代目当主として家督を継いだ。1854年の安政南海地震は、紀伊半島をはじめ四国沿岸などに甚大な被害をもたらし、数千人の死者を出すものであった。この時、広村（現在の和歌山県広川町）へ帰郷中であった梧陵は、自らの危険を顧みず、次々と稲むらに火をつけ、安全な高台にある広八幡神社への避難路を示し、押し寄せる津波から村人を守った。

そして、津波が引いた後も奔走する。避難所の村人に声を掛けて勇気づけ、庄屋や寺院から米穀を借り入れて炊き出しを行なった。さらに多額の私財を投じ、避難住宅の建設や大量の瓦礫処理、更なる津波に備え巨大な広村堤防の建設なども行ない、これらの大事業により雇用も創出、故郷の復興に大きく貢献した。後に、多くの恩恵に感謝した村人たちが、梧陵は固辞するも「濱口大明神」として祀ろうとしたほど。ただ、それらの費用は一企業が負担するにはあまりに大きく、番頭たちが頭を抱えたという。現在、その偉業は「稲むらの火」の物語として、小学校の国語、社会科などの教科書にも掲載されている。

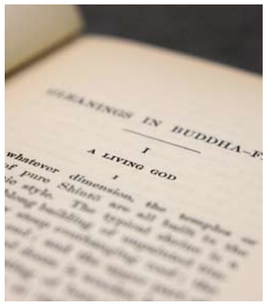
陸奥宗光と濱口梧陵、二人のまさに紀州魂は、今も脈々と受け継がれている。

高台にある広八幡神社は、村人たちの避難先であった。境内で燃やされた松明の灯りを頼りに泳ぎつき助かった漂流者もいたという。

広八幡神社内に建つ濱口梧陵碑。親友であった（右＝国立国会図書館蔵）勝海舟が送った言葉が刻まれている。

初代和歌山県議会議長濱口梧陵の像（和歌山県庁）

稲むらの火の館近くにある「広村堤防」を繋ぐように設置されている津波防止用ゲート、通称赤門。梧陵の教訓は今も人々の心に根付いている。



生きる神、A Living God

明治30年、梧陵の活躍を知った小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「A Living God」を著し、「稲むらの火」の物語は海外でも広く知られるようになった。その後昭和12年から小学校の国定国語教科書に掲載され、現在は小学校の国語の教科書をはじめ、社会や理科の教科書でも梧陵の教訓を伝えている。